

他者としてのパリ

——遠藤周作「爾も、また」再読

今橋映子

選ぶということがすべてを決定するのではない。人生におけるすべての人間関係と同じように、我々は自分が選んだ者によって苦しまされたり、相手との対立で自分を少しづつ発見していくものだ。

——遠藤周作「爾も、また」⁽¹⁾

1 陰惨な翳——「牧歌」のなかのリヨン

遠藤周作（一九二三～）は、昭和二五（一九五〇）年、戦後最初の留学生として、現代カトリック文学を研究するために渡仏、主にリヨンに学んだ。「敗戦国のカトリック留学生として、日本人もほとんどのいいヨーロッパに行かされた」⁽²⁾者の体験と省察とは、いくつかの根源的テーマに収斂して、最新作『深い河』に至るまで一貫して問い続けられ、変奏されてきている。それは山本健吉の

分類を借りるなら、⁽³⁾第一には神の問題、第二には人間の罪の意識や欲情の深淵をのぞくことの意味であり、そして第三には非人間的行為を生み出す精神構造に対する糾弾であり、そしてまた第四として有色人種と白色人種との差別観への抗議が挙げられる。

これらの主題が、戦後まだ五年しか経ていず、朝鮮戦争直前の時代に、「戦争犯罪国」である日本から、パリではなく、「保守的な田舎都市」であるリヨンに送りこまれた者から生まれたという事実には、私たちはいま一度、思いを至すべきであろう。確かに、遠藤周作の作品集『牧歌』の諸篇には、こうした戦後日本のいわば「特殊な状況」が強い、異様なまでに鋭敏な感覚が映し出す異国の都市の「陰惨な翳」があらわれている。

『牧歌』のなかのリヨンは暗い。それは、遠藤自身が書いているように、彼も敬愛する永井荷風がかつて描いた典雅な古都ではなかった。

荷風がこのまちに着いたのは四十年もむかし、しかしその面影はあの『ふらんす物語』時代と寸分違っていなかった。春白い雲を空にうかべバラと藤の花にねむりひそまるフルビエールの館と館、夏の午後、歩道をたたきつけて過ぎゆくこの地方特有の雷と稲妻を伴う夕立、その夕立が秋のさびしい霖雨となりマロニエの葉を一片一片落してゆくあの長い憂鬱な冬への移り変わりも、すべて詩人の追憶のままであった。しかし街の面影はそのままでも住む人の運命は変っていた。⁽⁴⁾冬がやってきた。夕暮になると、きまって街を貫くローヌ、ソーヌの両河から黄濁した霧

がこの古い街の石畳の路や青い角燈をなめながらはっていく。やがて霧に死に果てたように沈む夜のどこかで中世以来の教会の点鐘が遠く、遠く響く。私はそのはじめての冬にこのリヨンが欧州きつての悪徳の都であることを知った。

ふるびたしずかな外観のために数多くの旅人も知りえなかったこの街のおそろしい悪魔の相について私はまた書いてみたいと思っている。(「絵葉書の裏に」⁽⁴⁾)

彼は「冬——霧の夜」のなかで、フランスのどこにも見られぬ人間の肉欲のもっともドス黒いもの、淫靡なものがつまっている「悪魔的な街」^(ドイツ語)を描く。それは驚くことに中世紀の名残りをとどめる「黒ミサ」のことを指す。生きた女の白い肉体を祭壇として、残忍、淫靡で不潔きわまるミサが繰り広げられたというリヨンの古い古い地区の霧のなかを、主人公「ぼく」はさまよっていく。そして、ニュールンベルグや、ポーランドにおけるナチズムの虐殺、拷問、また日本人によつてなされたフィリピンや南京における犯罪の心理の裡には、この黒ミサ的な肉欲が隠されているのではないか——と自問するのである。戦後わずか五年——「狂暴でファナティック」との日本人評がまだ根強いフランスで、遠藤は犯罪者としての意識を心の奥深く感じている。その彼の眼に写る異国の都市の陰惨な翳に、現代の読者は慄然とする。むしろ永井荷風や島崎藤村など明治、大正期のフランス滞在記の方が、よほど「身近」に感ぜられるのである。

このように『牧歌』の諸篇は、一見フランスからのルポルタージュ風エッセーの体裁をとりながら、次第に人間心理の暗部に降り立ち、そのまま小説世界へと変貌していくという、実に特異なスタイルをもっている。例えば「恋愛とフランス大学生」では、冒頭フランスの物価が日本の倍であるというような、きわめて卑近な話題が書簡体で語られる。それから南仏出身の愉快な友人「ピエール君」の、素朴な恋愛話に発展すると思いきや、語り手は、ピエールの意中の人シモーヌの自殺事件と、彼女が、何とある雑貨店のだみ声の老人の情婦であったことを、明かすのである。

ピエールの去った後、ぼくは一人で寒々と街を歩きます。万霊節をむかえて陰気な街の裏に、ぼくは一つの古い黒い建物をみました。その壁にはこういう文字が彫りつけてありました。

「一九四三年、ゲシュタポ(ドイツ秘密警察)は、この建物の地下室で拷問を行つた」(…)

拷問の行われた地下室の暗い陰惨な内部を覗きながら、ぼくはシモーヌとこの地下室の闇に一致する何ものかを嫌悪と吐き気をもつて感じました。(「恋愛とフランス大学生」⁽⁵⁾)

この章に続く『牧歌』の次のエッセー「フランスにおける異国の学生たち」は、さらに深刻なテーマを扱っていく。ここで問題となるのは、こうしたナチズムに対する反ファシズム、抗独運動が、それもまた単なる輝かしい「レジスタンス」や、「うつくしいヒューマニズムの結末体」ではなかった——という暗然たる事実である。話題は、リヨンに学びにきた留学生たち、特にポーランドやハンガリーなど中欧からの留学生たちに見られる一つの傾向から始められる。彼らのうち、一

方は、自分たちが戦争中に受けた苦しみを通して、 Kommunismusの可能性に賭ける情熱派。もう一方は、失われた祖国を切々と慕って、言いようのない哀愁にひたっている学生たちである。ところが語り手が、「感傷的な夢を託していた」これらの中欧の学生たちのなかに、それとは全く違った存在がかくされていた――。

こうして次第に一つの小説へと変貌していく語りのなかに、「イレレーナ」というダンスの助教師――空虚な右目（実は義眼）が無気味な、愛想のかけらもないポーランド人女学生――と、「こびと」と称される男が、登場してくる。語り手は「こびと」の深い背後にある、肉体的なものではない、何か「ぶよぶよとした膨み」を憎みながら、彼を黙殺することができない。一方、語り手は、アルデイツシュ県で、抗独運動のマキ（Kommunist系の反独運動者）が、ドイツ人ではなく、同胞であるフランス人（例えばドイツ人に食料を与えた一般市民）を拷問、虐殺して、その死体をフォンス村の井戸に投げこんだ、との情報をつかみ、ぜひそれを見なければとの思いにかられる。全く意外にもそれに行くとはいだしたイレレーナと「こびと」。フォンス村の井戸に至って、この同行者の二人が、かつてナチズムの拷問にあつたポーランド人であつたことが明かされる。そしてまた、フォンスの虐殺も事実であつたことを、確認するのである。

すべては白昼の下でのように明らかにになりながら、それは白日夢の如くありうべからざるもの気がしました。レジスタンス、ヒューマニズムの戦い、世界はその華々しい戦いの背後にその

悲劇のあつたことを容認しないでしよう。ほくは穴の中に今一度、顔をさしのべ、ほのかな外光の下のこの永遠の人間地獄を眺めつけました。（フランスにおける異国の学生たち⁽⁶⁾）

2 石の街の重さ――「爾も、また」のなかのパリ

中篇小说「なんじ爾も、また」は、昭和三九年から四〇年にかけて雑誌『文学界』に連載、のちに「ルーアンの夏」、「留学生」（群像）昭和四〇年三月）とともに三部作を成して、昭和四〇年六月に単行本『留学』として刊行された。この三部作は、作者が昭和三五年から二年半近くも死と隣り合わせの闘病生活を送った後、そしてまた彼自身の留学生活からは十年以上も後に書かれたものである。それゆえ『牧歌』に見られたような「恐怖、審判、拷問、殺人の時代」といった、悲痛な感情は表に出ず、その代わり、異文化との葛藤というテーマが全体を貫いている。

「爾も、また」は、『留学』三部作のなかでは最も長く、また最初に書かれた作品である。舞台は、パリ。遠藤周作は、ディアボリックな街リヨンではなく、日本人留学生たちの溜り場パリに舞台を設定する。そして冒頭、日本人旅行者たちがハンブルグ飛行場で交わしているきわめて俗な会話から入ることで、作者は、日本人のパリ留学が敗戦国から戦勝国への屈辱的な旅であつた時代がすでに遠く過ぎ去っていることを暗示している。

主人公は、田中というフランス文学者である。すでに指摘されているように、日本人としてごく平凡な苗字をもつこの大学講師の留学体験を描くことで、遠藤周作は、ある意味ではきわめて図式的と思われるほど、異文化との衝突と葛藤とを浮かび上がらせている。けれども図式的と思いがながらも、読者がこの小説に捨て難い魅力を感じるのには、作者が周到に筋立てを用意し伏線を張った上で、主人公田中を、英雄にも卑小なる存在にも描かず、限りなく等身大に近いかたちで日本人の「典型的な」留学体験の一つの型を提示しているためであろう。そしてそのなかで、フランスという異文化、パリという都市は、絶対的な「他者」として、田中の前に、そして読者の前に立ちほだかるのである。

この小説では、三つの大きな縦系が絡み合っており、全体のドラマを構成している。第一には、田中自身がパリに到着してから結核に倒れて帰国を余儀なくされるまでの留學生生活の経過と、大学人事をめぐる人間関係。第二には、田中が専門とするサド研究の進展と、「サド」という対象への田中の内面的探究。そして第三には、建築家向坂を筆頭とする、パリの日本人の諸相が挙げられる。

第一の縦系——留學生生活の経過のなかで注目されるのは、田中の内面にある世俗的な感情と、研究者としての求道的精神を、ともに引き出してみせる作者の手腕である。田中は、この留学によって、自分は十八世紀というマイナーな領域の研究者でありながら、現代文学をやってもはやされる助手の菅沼より一歩先んじられる、と自負している。田中はすでに結婚して、赤ん坊までいる身

だが、息子のことはともかく、妻に対してはさしたる愛を感じていない。妻の方も、夫の印税で株を買おうなどというつまらぬ知恵を働かせ、それを相談する手紙がパリにいる田中を苛立たせる。東京では、自分のゼミに出てくる女子学生の一人に妙に関心を寄せ、恰好をつけて菅沼の悪口などをその前で言ってしまう田中だが、パリでは、だからといって「女を買う」ようなこともできない。

田中は、そうした世俗的な一面、モンパルナスにたむろするような日本人たちとは袂を分かち、一人黙々と国立図書館に通って文献を漁り、サドの足跡を実際に執念深く辿っていく情熱をもちあわせている。結局はその生真面目すぎる無理が、結核という病いに彼を導いてしまうのである。

この小説において、田中の妻という存在、そしてまた大学における直接の上司、上田教授という存在——つまり田中の救済役になるべき二人の存在が、ともに不在のものとして扱われていることにも注意すべきだろう。小説中、田中の目論見に反して、助手の菅沼は、彼の後を追ってパリに留学して来る。しかも菅沼は、おそらくは大学の人事問題の絡みから、田中が教養部へまわされるという知らせまで持ってくる。菅沼は、例の女子学生、野坂和子と近く結婚し、しかも新しい世界文学全集に入る翻訳の話まであるらしい。とどめようもなく不当に流れていく自分の人生に対して、田中は有効な手を打つ術をもたない。次第に日本人社会から孤立して、彼はいよいよサドの世界に没入していくのである。

第二の縦系——田中が専門とするサド研究の詳細な経過は、とかく図式的と評されるこの小説に

独特な陰翳を与えている。限りなく平凡な外国文学者田中が、サドという特異な対象に取り組む理由——それがこの小説のライトモチーフである。田中は、パリに来て宿願かなって、サド研究家ジュール・ルビイに面会する。彫大な「サド侯爵伝」を書いたこの男は、大学人ではなく、「淫する」という表現がびったりなほどサド研究に半生を費した奇人である。しかし貴重な資料を多数もっていると思われるルビイに面会できた喜びも束の間、この無愛想で貪欲な男から田中は、「君がなぜサドをやるのか、わからん」という、決定的な言葉を投げつけられる。

なんのために俺はサドをやりはじめたのか、葡萄酒を舐めながら田中は助手時代から自分が研究題目にこの牢獄文学者を選んだ理由を、今、苦しい気持で噛みしめてみた。理由は幾つもある。ルビイにさつき言ったことは決してうそではなかった。あの仏蘭西革命を前にして、崩れおちる自分の階級に気づいた貴族の立場は日本の現在の知識階級に似ていることに、十八世紀文学を専門にする田中は興味をもちはじめたのだ。〔…〕しかしその時、ふたたび、あのルビイの醜い歪んだ顔が彼の胸を横切った。(本当かね) その小さな光る眼は田中をみて嘲るあざむように言っていた。(あんたもサドを、ポーヴォワールのようにうまく利用しているのではないかね) (二二〇頁)

ほとんどの仏文学者が手をつけていないサドをやるうと、田中が眼をつけたのには、学者としての地位を確保できるとの打算が働いたことも確かである。しかしパリに来て田中にとってより深刻となってきたのは、サド論を書く際に援用するフランス人研究者の説が、日本人の自分にとっては言説として空虚なものとしか感ぜられない、という決定的な認識だった。田中は自分自身のサド論のノートを読み返し、サドにおけるサディスムの特徴に、「処女にたいする憎悪」と、「基督教が教える神のイメージを剝ぐ」という二点が挙げられると自ら書きつけていることに、思わず溜息をついてしまう。これらの言葉が「生涯、日本人の自分とは関係がない筈だ」と、痛いほどわかっていくからである。田中はこうした絶望感を抱きながらも、サドの生涯の転機となるいくつかの事件と、その舞台となった場所を訪れる一方、文献調査を執拗に続けていく。そして小説後半「田中のノートの一節」として掲げられた研究ノートのなかでは、サドの牢獄時代にサド文学の転機を見、〈書く〉という行為に賭けるサド像に照明を当てた、(少なくとも)田中独自の見解と記述へと、発展していく。

ところでこの小説中、サド研究の縦糸のなかで繰り返しあらわれる、妙に生々しい体験がある。それはサドが事件を起こした場所の一つ一つを訪れるたびに、田中にわき起こってくる情欲ともいうべきものである。

ルビイは(アルキエイエの街の)その石畳こそかつて、〔乞食女〕ローズ・ケレルが(サドに鞭打たれて)血だらけになって逃げ出した道だとあの著書に書いている。田中が、その石畳を指で

こすると赤黒い石の一つ一つが二百年ちかい間、人々の足にふまれて、すっかり摩滅しているのが感じられた。冬の夕暮の微光をうけて車輪の痕らしい長い凹み^{くぼ}が二本のレールのように続いているのもわかった。彼はこんな道を東京で見たことはない。こんな道は日本には決して存在しなかった。その人間の生きている臭がしみこみ、人間の足の脂^{あぶら}と臭気がしみこんでいる石の道を見たことがなかった。サドが歩き、ローズ・ケレルが走っていったこの石畳の石を、田中はできれば、ほじくりだして持ってかえりたかった。そして恥ずかしくなければそれを舐^なめまわしてみたいとさえ思った。肉欲の疼^{うず}くような感覚を感じながら田中は眼鏡を幾度も指でずりあげる。(一三三―一四頁。〔内引用者〕)

田中には、サドが反基督教的だったとか非情の眼の持主だったという説は、実感として感じられない。ところが、「石畳の道を眼鏡をずりあげて感じているこの眩暈^{めまい}に似た感覚」こそは、自分のものだと思う。田中は、この後も、マルセイユ事件のあった現場の「階段のへこみ」、シャラントンの墓地の土、そして最後にはラ・コストの城の壁に至るまで、サドが生きた「現場」に立ち会うたびに、この「心の疼き」を感じるのである。それは、遠藤周作自身が探求する「人間の不思議」とその無限の暗黒に対する執拗な情欲^{じやく}とも、似通った情念であったかもしれない。一見平凡なフランス文学者田中が、なぜサドをやらねばならないのか——その真の理由が、この情欲のなかに隠されているとも読めるのである。

さて田中は、この留学とサド探求の経過のなかで、自分にとつての「外国文学」の意味を問いつめる。そしてある日、「外国文学者」と、少し離して書きつけた自分の文字を見ながら、ハッと考える——

そう。外国文学者とは、外国文学と者(自分)との違和感をたえず意識している人間なのだと思います。自分と全く異質で、自分と全く対立する一人の外国作家を眼の前におき、自分とこの相手とのどうにもならぬ精神的な距離と劣者としての自分のみじめさをたつぷりと味わい、しかも尚^{なほ}その距離と格闘しつづける者を外国文学者とよぶのだ。(二二三―二四頁)

他者としてのサドを眼の前におき、その絶対的^{絶対}他者性によって自分を照らし出し、苦しみながらその距離を埋めていこうとする過程——遠藤周作が田中を通じて描こうとしたこのような異文化体験は、明治以来パリに赴いた多くの日本文学^{ぶんがく}者たちによって、すでに書き記されてきた。例えば高村光太郎がそうである。彼はロダンの彫刻に憧れ、ノートルダム寺院の石の肌^{かわ}にひそかに「接吻^{くちづけ}」したと書きながらも、その一方で、パリでは、自分の身の周囲には金網^{かみづな}が張られ、本当の接触が絶たれていると言う。また木下杢太郎は、フランス文化を支えるギリシャ、ラテンの古典の層の厚さを知ってしまったならば、それを学ばない限りフランス文化を一生把握したことはない

と絶望する。あるいは、遠藤がこの小説中で批判している横光利一にしても、「日本製の物尺は、パリへ来れば二倍にしなければ底へは届かぬ。〔…〕長くこの地にゐなければ、フランスは分り難いといふものは、フランスの伝統と競争しようと思ふものだ。この者は死ぬ以外に方法はあるまい」と述べている。パリを了解不可能な別個の体系として自らを疎外してしまうという点で、横光は、フランス文学者田中と同様の体験をすでに書き記しているのである。

「爾も、また」のなかでは、第三の縦糸として、パリに往来する日本人たちの、異文化に対するいくつかの型が呈示されている。一つは、ヨーロッパ文化の重みを全く無視する者。例えば助手の菅沼は、日仏の越えがたい距離を感ずることもなく、留学生としても、またパリの日本人社会のなかでもうまく身を処して、新進気鋭の学者になる道を心得ている。またヨーロッパ文化を小器用に猿まねする者もいる。例えば小説家真鍋は、パリに来て自分が二流であることをいやというほど見せつけられるが、残って不毛な人生を送るより、日本に帰って二流なりにもてはやされる道を選ぶ。また元日本銀行員小原や、画家藤堂のように、パリに住みついてしまった挙句、根を失ったみすぼらしさだけをさらけ出している敗惨者たちもいる。

そして四つ目に挙げられるのが、建築家向坂や、田中のように、ヨーロッパの重みをともに受けとめて格闘し、敗れ去っていくという型であろう。田中より二年以上前に留学し、一人孤独に学問に励んだ向坂は、しかしついに結核に倒れて帰国を余儀なくされる。彼は、たまたま同宿ゆえに友人となった田中を伴って、トロカデロの宗教彫刻複製美術館を訪れ、パリという石の街の息苦し

さについて語ってきかせる。

「こんなつまらん小さな美術館一つに入っても、ほくら留学生はすぐに長い世紀に渡るヨーロッパの大河の中に立たされてしまうんだ。〔…〕河そのものの本質と日本人の自分とを対決させなければ、この国に來た意味がなくなってしまうと思つたんだ。田中さん。あんたはどうします。河を無視して帰国しますか」(二五一〜五二二頁)

そしてこの向坂同様、田中はサドという他者に挑んで拒まれ、やはり結核に倒れて帰国するという運命を辿る。向坂を思い出して再び訪れたトロカデロの美術館のなかで、田中は彼の言葉をかみしめる。

リユー・ミネルバの石柱彫刻でも、オータンの聖堂から複製してきた「エジプトを逃れる聖母と基督」像(図A)でも、その前に立つて向かいあっているだけで彼は、重いテコで胸を押されてくるような圧迫感を感じた。その圧迫感はいいかえれば、日本人の彼にはこの像が全く擱めな(おぼつか)いという気持から生れたものだった。〔…〕渦巻模様の石を両手で支えた、動物とも人間ともつかぬ顔、無花果の葉のかげからこちらを覗いているアダムとイブ(図B)、真直に一点を凝視しているダビデ王、そうした石像のまわりにはまるで冷たく凍つたような空間がとりまいてい



▶ 図A 「エジプトへ逃れる聖母と基督」 オータン聖堂、柱頭彫刻、

十二世紀

▼ 図B 「イヴの誘惑」 オータン、ロラン美術館、十二世紀



る。向坂はこの空間を、運命しかもため中世紀の重くるしきさだと言っていた。

中世紀というよりは、第一期のヨーロッパの重くるしきさだと言った。しかし、田中はその重苦しきさのもう一つの面にヨーロッパ文化に無縁な者に、本当のヨーロッパ文化が与えてくる圧迫感が含まれているのだと感じた。(二二五頁)

この小説は、結核で帰国する田中のホテルの部屋に次の日本人留学生が入る、という連絡があるところで終わる。すでに光太郎、李太郎、横光が記し、さらに向坂―田中―次の留学生……と永遠に続くであろう反復。「爾も、また」は、出口のない、遠藤自身の個別的で特異な都市体験ではなく、日本人に普遍的なパリ体験でもあると主張されているのである。遠藤周作はこの小説の後、「留学」中の他の二篇のなかで、この東西対立がより鮮明だったキリシタン時代――キリスト教の受容をめぐる葛藤を描く方向へと歩み出す。それが『留学』刊行の翌年（昭和四一年）、小説『沈黙』に結実していくことを知っている読者は多いであろう。

他者としての異文化と自分との距離をたえず意識し、その他者との格闘によって、劣者としての自己をみつめ直し、対象に近づいていく過程。遠藤周作が戦後五年目の留学において得た体験と、小説とが、果たして永遠反復される普遍性を帯びているのかどうか――それが現代の私たちに投げかけられた問いである。

確かに、敗戦という大きな転機を迎えた後の日本人にとって、異文化との乖離は、だからといって、光太郎や横光のような〈日本回帰〉に直接結びつくものではなかった。遠藤周作の小説「爾も、また」に出口が見えないのはそのためである。それでは私たちは、他者としての異文化によって、いかなる自己を発見していくのか。答えのいまだない問いのなかに、「爾も、また」という小説のもつ真の意味があると思われる。

註

- (1) 遠藤周作『留学』新潮文庫、昭和四三年、二二三頁。以下、本文中のページ数は、本テキストに拠る。
- (2) 遠藤「ぼるとがる紀行」『牧歌』所収、新潮文庫、昭和四九年、二二六頁。
- (3) 山本健吉「遠藤周作——その一貫した主題」『新鋭文学叢書6 遠藤周作集』筑摩書房、昭和三五年、所収。
- (4) 遠藤『牧歌』一三九〜四〇頁。
- (5) 同書、一九頁。
- (6) 同書、五四頁。
- (7) 以下、日本人のパリ体験の諸相については、拙著『異都憧憬——日本人のパリ』柏書房、平成五年、を参照されたい。
- (8) 横光利一『欧州紀行』定本横光利一全集第一三卷、河出書房新社、昭和五七年、三四二頁。

編者紹介

鶴田欣也 (つるた きんや)

1932年東京生まれ。ブリティッシュ・コロンビア大学教授。

著書：*Approaches to Modern Japanese Novel* (Sophia Univ. Press), 『日本近代文学における「向う側」——母なるもの性なるもの』, 『川端康成論』(以上, 明治書院), 『漱石の『ころ』——どう読むか, どう読まれてきたか』『アニミズムを読む——日本文学における自然・生命・自己』(以上, 共編著, 新曜社)。



日本文学における〈他者〉

初版第1刷発行 1994年11月18日

編者 鶴田欣也

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社 新曜社

〒101東京都千代田区神田神保町2-10多田ビル
電話(03)3264-4973(代)・FAX(03)3239-2958

印刷 星野精版印刷

製本 イマキ製本

ISBN4-7885-0505-3 C1091

Printed in Japan

執筆者紹介

(執筆順)

小谷野敦 (こやの あつし)

1962年茨城県生まれ。大阪大学言語文化学部専任講師。
著書：『八犬伝綺想』(福武書店)ほか。

稲賀繁美 (いなが しげみ)

1957年東京都生まれ。三重大学人文学部助教授。
著訳書：『歌麿』(新潮社), プルデュール『話すということ』(藤原書店)ほか。

竹内信夫 (たけうち のぶお)

1945年大阪生まれ。東京大学教養学部教授。
著訳書：『スタンダード仏和辞典』(大修館書店), パング『自死の日本史』(筑摩書房)ほか。

上垣外憲一 (かみがいと けんいち)

1948年長野県生まれ。国際日本文化研究センター助教授。
著書：『雨森芳洲』(中公新書), 『鎖国』の文明論』(講談社)ほか。

佐伯順子 (さえき じゅんこ)

1961年東京都生まれ。帝塚山学院大学助教授。
著書：『遊女の文化史』(中公新書), 『文明開化と女性』(新典社)ほか。

佐々木英昭 (ささき ひであき)

1954年鳥取県生まれ。名古屋工業大学助教授。
著書：『夏目漱石と女性』(新典社), 『新しい女』の到来——平塚らいてうと漱石』(名古屋大学出版会)ほか。

池田美紀子 (いけだ みきこ)

1942年東京都生まれ。慶応義塾大学講師。
訳書：『小泉八雲——明治日本の面影』(講談社学術文庫, 共訳)ほか。

コーディ・ポールトン (Cody Poulton)

ヴィクトリア大学助教授。近代日本文学。

遠田 勝 (とおだ まさる)

1955年東京都生まれ。神戸大学国際文化学部助教授。
著書：『小泉八雲——回想と研究』(講談社学術文庫, 共著)ほか。

中村和恵 (なかむら かずえ)

1966年札幌生まれ。帝塚山学院大学専任講師。
論文：『ナショナリティとセクシュアリティ——パトリック・ホワイト Twyborn Affair (1979) を例に』(『オーストラリア研究』2号)ほか。

ISBN4-7885-0505-3 C1091 P4429E

定価4429円(本体4300円・税129円) 新曜社

日本文学における

〈他者〉

新曜社

鶴田欣也[✦]編[✦]

[✦]執筆者 池田美紀子 稲賀繁美 井上健 今橋映子 上野千鶴子 上垣外憲一 T・ゲーセン 小谷野敦 佐伯順子
榊敦子 佐々木英昭 竹内信夫 遠田勝 中村和恵 S・J・ネイピア 萩原孝雄 C・ポールトン 三浦俊彦

日本文学における

〈他者〉

鶴田欣也[✦]編[✦]

✦新曜社

[✦]執筆者 池田美紀子 稲賀繁美 井上健 今橋映子 上野千鶴子 上垣外憲一 T・ゲーセン 小谷野敦 佐伯順子
榊敦子 佐々木英昭 竹内信夫 遠田勝 中村和恵 S・J・ネイピア 萩原孝雄 C・ポールトン 三浦俊彦